

「馬場小室山遺跡フォーラム」第59回ワークショップ**【実践！パブリック・アーケオロジー】**

馬場小室山遺跡を形成した「見沼文化」(人類活動と環境変遷)の追及、そして未来への展望

1.【序】特集＜パブリック・アーケオロジー＞:2004年12月26日から10年目を前にふりかえり「入門 パブリック・アーケオロジー」から「**実践！パブリック・アーケオロジー**」へ！！**1-1.＜パブリック・アーケオロジー「第一幕」(視点の多様性)から俯瞰する日本考古学と再生の姿＞**

【方針】考古学のこれまでの学説にとらわれず、しかし、1万年という時間軸は決して忘れず、あくまで時間の経過に対して行われる、あるべき問いかけへの目的と意義を具体化する。

【10年後の新スタート地点】日本考古学の歩みをパブリック・アーケオロジーから再生すると何が見えるか？ パブリックと考古学の関係という視点から見えてくるもの、そこからパブリック・アーケオロジーが始まり、これまでとはちがう考古学へと向かうスタートラインに立つことになる。

1-2.＜パブリック・アーケオロジー「第二幕」(新たな可能性)への挑戦＞

【方針】これからの考古学はどうあるべきか、考古学の現代史をパブリック・ドメインの中でどう位置づけることができるか、失ったものの価値を「癒し」に留めることなく、コミュニティ生成の原点として普段扱いできるように考古学が対象とすべき視野の拡大と未来化を目指す。

【10年目のチャレンジ】馬場小室山遺跡から「見沼文化」へ、「見沼文化」から「見沼フィールド・ミュージアム構想」へ、そして「山田湾まるごとスクール」の可能性へ、と「第二幕」の展開に通底する志向は、「モノ」から「ヒト」へ、という社会との直接的な関わりあいへのチャレンジである。

2.【議論】馬場小室山遺跡に学ぶパブリック・アーケオロジー10年の成果**2-1.五十嵐 聡江「パブリック・アーケオロジー展望」**

・次世代のパブリック・アーケオロジーは、考古学は主役から大人の脇役へ。主役は？そう、あなた「市民」です。考古学が市民生活に溶け込む努力を種々の場面で一緒に模索し実践します。

2-2.鈴木 正博「湾潟湖交流文化」と定住制社会の出現—馬場小室山遺跡と縄文時代後晩期**安行式社会の特質—**

- ・「湾潟湖交流文化」とは、湾→潟→湖という環境変化に対し、各々の拠点集落が夫れ以前と同様の生業を維持する対応により、生業の場を湖→潟→湾に移動・協業する交流関係を指す。
- ・縄文式早期末葉～前期初頭、前期後葉、中期末葉における寒冷化(海退)現象は拠点集落の分散化(「**集落てんでんこ現象**」)に大きな特徴を有し、「湾潟湖交流文化」の形成は一般化しない。これに対し、後期後葉における寒冷化(海退)現象は後期中葉拠点集落の集約化(「**母村集落維持現象**」)という新たな社会構成を実現すると共に「湾潟湖交流文化」を発達させた。
- ・一例として製塩土器出土遺跡は、湾における集中作業場の「**製塩遺跡**」、潟(河口域)に形成される拠点集落であり交流の市場機能を有する「**市場遺跡**」、湖(ポロロッカ影響域)からの交流集落である「**消費遺跡**」の三層構造に分かれ、典型的な「湾潟湖交流文化」を形成する。
- ・「集落てんでんこ現象」は母村も解体することから定住制ではない。これに対し、「母村集落維持現象」は定住制に相応しく集約化が図られると共に、馬場小室山遺跡第51号土壇に観る「土器型式」の累積現象のように、定住制と表裏の関係である多世代にわたる祖霊崇拜の継承性が認められる。生業の協働性とそれを支えるイデオロギーが顕現化した後晩期安行式社会の出現である。

3.【報告】3・11東日本大震災の復興と次世代パブリック・アーケオロジー**齋藤 瑞穂「山田湾まるごとスクール」は何を学んだか？」**

・「文化財レスキューのネクスト・ステージを模索する—岩手県山田町で地元の郷土史研究会との交流研究集会を開催して—」『新潟史学』第70号(2013.10)。考古学は無力か、できることはないか。

4.【連絡】その他活動連絡・予定:**(1)藤原書店『大田堯自撰集成』(全4巻)刊行開始**

- ・2013年11月発刊(隔月配本予定)／四六変上製／各巻口絵・月報付
／予328頁～550頁／予各2,200円～6,000円
- ・馬場小室山遺跡からパブリック・アーケオロジーが誕生した経緯を月報にて紹介しました。

(2)『実践！パブリック・アーケオロジー』の刊行

- ・「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」によるパブリック・アーケオロジー活動記録の集大成が完成！

以上